

あがつま



「兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。」

(ローマの信徒への手紙 12章1節)

♪ 賛美歌を歌おう ⑤

『くしき星よ、闇の夜に』

(讚美歌 118番)

ベツレヘムへと向かう博士たちの目線でその心情を歌う、公現日にこそ歌いたい賛美歌です。

作詞者は、英国国教会の司祭、レジナルド・ヒーバー (1783-1826)

です。19世紀の初めまで、国教会の公式の礼拝で詩編歌以外の賛美歌を用いることは認められていませんでしたが、もし、このヒーバーの熱意がなかったならば、今でもそのままだったかも知れません。ヒーバーは国教会の牧師家庭に生まれ、オックスフォード大学で詩人として名を馳せました。そして、1807年には国教会の司祭に叙任されたヒーバーは、父の後を継いでイギリス西部の農村、ホドネットの

教会の牧師を16年間務めました。この時期に彼は多くの賛美歌を創作し、信徒たちと共に礼拝で歌ったのです。『くしき星よ、闇の夜に』もその中のひとつで、公現日の賛美歌として創作されました。

ヒーバーは、厳格に教会暦に沿って守られる国教会の礼拝で用いるため、その日の教会暦に定められた聖書箇所から賛美歌を創作しました。

1820年、ヒーバーはそれまでの賛美歌をまとめて賛美歌集を編集し、英国国教会の公認を得ての出版を模索しましたが、公認を得られませんでした。その後、インド主教に任命されたヒーバーは、インドの過酷な環境でも精力的な宣教に励んでいましたが、インドに渡って3年足らず、42歳の若さで急逝してしまいました。

ヒーバーの死後、妻アメリカによって彼の賛美歌集が出版(1827年)され、念願であった英国国教会の公認を得ることになり、英国国教会はその典礼の中に創作賛美歌を取り入れていくことになったのです。

公現日まで続くクリスマスの季節に、御子を拝むためにベツレヘムへと向かう博士たちになった気分です、この『くしき星よ、闇の夜に』を賛美してはいかがでしょうか。

(稲垣真実)



